

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00324

研究課題名(和文) 清代後半を中心とした『水滸伝』の研究

研究課題名(英文) The Shuihu Zhuan, especially on the second half of the Qing Dynasty

研究代表者

氏岡 真士(Ujioka, Masasi)

信州大学・学術研究院人文科学系・教授

研究者番号：60303484

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：清代において『水滸伝』は、けして七十回本が市場を独占していたわけではない。各種の繁本や簡本が、出版競争を繰り広げていたのである。

『水滸伝』は、その人気ゆえに本編のみならず、さらに続書や戯曲、他言語による翻訳など様々なかたちで展開していた。とりわけ乾隆年間(1736-1795)以降において、状況はさらに複雑な様相を呈する。

本研究は、こうした状況下における具体相を、個別に明らかにしたものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『水滸伝』の研究は江戸時代の受容や百二十回本に関わるものを除けば、明代を中心としたものが盛んである。だが清代の『水滸伝』は、けして七十回本の独擅場というような単純なものではなかった。ゆえに実態解明が遅れている清代を中心とした研究は、それ自体が学術的・社会的意義をもつ。

『水滸伝』の展開は、およそ乾隆年間(1736-1795)以降さらに複雑な様相を呈する。その個別具体相を、本研究は一定程度明らかにすることができた。これは中国文学研究のみならず、当時の印刷出版業の実態や江戸時代の唐話学の水滸、清朝支配者の言語たる満洲語による受容など、多方面に資する知見を提供する点で、特に意義を有すると言えよう。

研究成果の概要(英文)： In the Qing Dynasty, the Shuihu Zhuan market was actually not dominated by the 70-chapter version. There were several versions of both the complicated and simplified editions competing for publication. Due to the popularity of Shuihu Zhuan, except for the main story, there have also been some sequels, dramas, translations and so on. Especially after the Qianlong period (1736-1795), the situation became more complex.

This study specifically shows the various aspects related to the above.

研究分野：中国文学

キーワード：水滸

1. 研究開始当初の背景

清代の『水滸伝』に関する研究は、明代のそれに比べて遅れており、それには歴史的な背景があった。

『水滸伝』は、伝統的には元の施耐庵らの作と言われてきた。だが実際は、明の嘉靖年間(1522～1566)の成立と考えるのが穏当であろう。そのころ郭武定侯こと郭勳という実力者が、『三国志演義』や『水滸伝』を私刻したとされるのは有名である。これについては井口千雪氏の一連の研究に詳しい(『三国志演義成立史の研究』2016年ほか)。また北京の中国国家図書館は、同館所蔵の「忠義水滸伝二十巻一百回存八回」を「明嘉靖刻本」としている。この残本については、たとえば佐藤晴彦氏や馬幼垣氏の先駆的研究があり、その後も種々の分析が加えられているが、それが直ちに郭武定侯には結びつかないとしても、およそ嘉靖年間ごろの成立であることを否定するのをもたまた容易ではない。ちなみに上海図書館にも、別の古い『水滸伝』残葉が蔵される。そして万曆年間(1573～1620)ともなれば、二十五巻から成る簡本や百巻百回本などが刊行されており、後者は不分巻百回本や百二十回本をへて、明末の崇禎十四年(1641)ごろ刊行された、いわゆる七十回本へと至る。

二十世紀に入って、中国では胡適が近代的な『水滸伝』研究を開始する(「水滸伝考証」、1920年)。そのとき用いられた主たる資料は、七十回本であった。これは恐らく前世紀における石版印刷の流行に伴って、七十回本『水滸伝』が普及したことの影響を蒙ったのである。ほどなく青木正児らの助けによって、胡適は多くの資料を新たに加えて研究を進める。そのとき重視されたのは七十回本に加えて、百回本や百二十回本に関わる文献類であった(「水滸伝後考」、1921年)。これに対して魯迅は、胡適が後出と考えた百十五回本の類を簡本と呼び、また胡適が先行すると考えた百回本の類を繁本と呼んだうえで、前者は後者よりも古いと考えた(『中國小説史略』)。残念ながら魯迅のこの説は、戦後日本における白木直也氏や大内田三郎氏の研究によって実質的に否定されるのだが、こうした動向もまた、実は『水滸伝』研究における明代重視に拍車をかけたと見受けられる。

近年日本においては、江戸時代の『水滸伝』に関係する研究が活発である。本研究開始当初の段階で、たとえば中村綾『日本近世白話小説受容の研究』(2018年)や孫琳淨『日本近世における白話小説の受容 曲亭馬琴と『水滸伝』』(2021年)が出版され、また中原理恵氏や宮本陽佳氏が多くの論文を出しておられた(のち2023年に中原氏は『百二十回本『水滸伝』の研究』を、2024年に宮本氏は『近世における唐話学の展開』を公刊された)。江戸時代においては『水滸伝』に限らないが、おもに明刊本が輸入され大事にされたのであって、これまた『水滸伝』研究における明代重視の歴史的背景を成すと言えよう。

2. 研究の目的

おおよそ上述のような背景によって、清代の『水滸伝』に関する研究は相対的に遅れていたと考えられる。しかし明代から胡適の研究までには三百年になんなんとする時間差がある。また、この清代、とくにその後半にあたる大よそ乾隆期以降は、つとに上田望「清代英雄伝奇小説成立の背景 貴州安順地戯よりの展望」(1994年)や氏岡真士「『五代史平話』のゆくえ 講史の運命」(1998年)が論じたように、『水滸伝』に限らず英雄伝奇小説の類がリバイバルやリメイクも含めて大量に出版されるなど、新たな展開が見られる。そして『水滸伝』に即して言えば、『忠義 xuan2 図』や『蕩寇志(結水滸全伝)』など続書・派生作品の類が出現している。そこでこの時期を中心としつつ、その前後も視野に入れながら、広く関連の諸問題について調査分析を進め、従来の不足を補うことが研究の目的となった。

3. 研究の方法

新型感染症の蔓延などの影響で、当初の計画を見直した面もあるが、方法自体に大きな変更は無い。すなわちテーマの性格に鑑みて、基本的に忠実な方法を採用した。つまり原典を初め新たな対象について調査分析し、従来の知見と比較照合しつつ研究を深化させてゆくのである。他者の論考についても情報収集に努めた上で、批判的に(鵜呑みにせず)かつ真摯に学び、黙殺あるいは剽窃を疑われても仕方がないような内容があれば他山の石とする。

さて調査研究の対象は、大きく三つに分かれる。まず『水滸伝』本編であり、つぎに続書であり、さらに派生作品(および関連著作物)である。ただしこれらは、いわば有機的につながっているから、実際問題としては、けして機械的・観念的に割り切れるものではない。

そのうえで敢えて整理すれば、研究の基層を成すのは当然ながら『水滸伝』本編である。一般に繁本・簡本に二大別され、かつ前述したように専ら繁本に注目が集まりがちだが、清代の実情としては簡本もまた読者層を有し、たとえば陳簡侯(陳枚)の序をもつ諸版本が、とくに清代後半においては目につくようになる。これは恐らく、句曲外史の序をもつ七十回本の類がいわば廉価版として盛んに出版されたことと表裏を成す、当時の出版競争の激しさを物語っている。こうした事実を無視して繁本だけを語っても、往時の実態とはかけ離れてしまうであろう。

続書については、上述の『蕩寇志(結水滸全伝)』に先立って、明末清初に青蓮室主人『後水滸伝』や陳忱『水滸後伝』が出現している。前者は孤本(大連図書館蔵)だが、影印本は研究代

表者が現在勤める信州大学の附属図書館にも収蔵されており、ほかに排印本も複数ある。これについては「《後水滸傳》的構思」(2019年)と題した拙稿で分析している。いっぽう後者は、『椿説弓張月』との関係などで日本でも有名だが、中国でも多くの版本が出ておりロングセラーとなった。これについては次節で改めて詳述しよう。なお『蕩寇志(結水滸全伝)』については、拙稿「『水滸後伝』と『宣和譜』」(2020年)を参照されたい。

派生作品(および関連著作物)は、その筆頭格としては『忠義 xuan2 図』が挙げられよう。これは単純に言えば百二十回本『水滸全伝』の内容を演劇化したもので、宮廷大戯として乾隆年間に書かれたのち、恐らく実際の上演等を踏まえて改変されたうえで、今日まで伝わっている。改変前の姿を留めた資料も断片的に残っているが、いずれにせよそこには元明に遡る水滸戯の利活用が読み取れるとともに、京劇など今日の伝統劇などに影響を与えた面も見出せ、まことに興味深い資料である。ただし大部なものであり、全容の解明には時間がかかる。

なお『金瓶梅』については、たとえば川島優子「『金瓶梅』の構想とその受容」(2019年)や田中智行『新訳金瓶梅』(上巻2018年、中巻2021年、下巻は近日刊行の由)など、最近の優れた成果を参照されたい。

さて関連著作物として、まずは江戸時代における『水滸伝』の和刻や訳解などが容易に想起されようが、これについては上述した。実際には日本語以外にも、他言語による翻訳や研究が色々となされている。このうち満洲語による翻訳は、清朝支配者の言語によるものとして特に注目されるが、これについても次節で改めて述べよう。

4. 研究成果

『水滸伝』本編については、いわゆる繁本のうち分巻系諸本の関係及び一般に簡本とされる三十巻本の底本について、以前は閲覧が困難だった石渠閣補刊本などの原典や、近年の内外における関連論考を含めて検証することによって、かつて提示した私見を補正し発展させることができた。

また簡本のうち、上下二段組みの上段に『水滸伝』・下段に『三国演義』を掲載する“英雄譜”系諸本について、『水滸伝』・『三国演義』双方に目を配ることで、『水滸伝』に対する従来の所見を深化させると共に、『三国演義』の版本問題にもささやかながら一石を投ずることができた。

つぎに続書については、『水滸後伝』の原刊本系統について、紹裕堂翻刻本と三多齋刊本の関係を中心に掘り下げた。この問題については、石見卓也氏に「『水滸後伝』の版本について」(「北九州中国言語文化研究論集」第11号、北九州中国言語文化研究会、2003年)という優れた研究があるが、掲載誌が稀覯本のためか利活用されていない。研究代表者は神田正行氏のご配慮により、幸いにも石見論文を読むことができた。そこで石見論文を批判的に(鵜呑みにせずに)検証し、さらに海外所蔵資料やEllen Widmer(魏愛蓮)の関連研究も視野に入れて調査分析することにより、一般には原刊本に準じて扱われがちな紹裕堂翻刻本(『古本小説集成』等所収)がじつは清代後半の粗製物にすぎず、いっぽうで軽視されがちな三多齋刊本のほうが先行し内容もかなり丁寧に書かれていることを、清代における中国各地の出版業の動向も勘案しつつ跡付けることができた。

さらに派生作品については、全十本二百四十齣からなる長編である宮廷大戯『忠義璇圖』を分析する一環として、楊雄が妻の潘巧雲を成敗するに至る物語を中心に描く明の沈自晋『翠屏山』伝奇との関係を分析した。その際には他に、小説本文はもちろん清の選集『綴白裘』なども検討対象に含め、また物語の内容のみならず曲辞や韻律の特徴も分析することで、いわば立体的に関連の諸問題を論ずることができた。

そして関連著作物については、まず江戸時代最大級の規模を持つ唐話辞書である『俗語解』において、『水滸伝』がどのように用いられているかを実証的に明らかにした。この問題については以前にも論じたことがあるが、関連資料を再検討することによって、たとえば七十回本の本文も利活用されていることや、いわゆる「引用書目」が最近の研究者による作成であろうことなど、新たな知見を加えることができた。

つぎに日本語以外の諸言語による受容例として、満洲語に翻訳された『水滸伝』の問題を、その底本に即して考えた。そもそも『水滸伝』の満洲語訳は、写本の形で中国内外に一定数所蔵されることが、Martin Gimm(嵇穆)や鋤田智彦の諸氏によって明らかにされている。これは満洲語が清朝支配者の言語であったことから見れば、けして不思議ではないし、その重要性も推して知るべきであろう。これらのテキストのうち、パリのフランス国立図書館(BnF)所蔵の写本は、ほぼ完存するうえ電子版も公開されており、非常に重要なものである。寺村政男氏は最近、このテキスト全文について翻字のうえ訳注を加えるというすばらしい成果を完成させた。すなわち『満洲語「水滸傳」の研究・翻刻と研究』全五冊(「水門(みなと)・言葉と歴史」編集部、2019~2022年)である。そこでこの成果を参照しつつ改めて満洲語の翻訳内容を読み込むことで、パリ本に基づいた『水滸伝』はどのようなテキストであるかを改めて考察した。

パリ本は本文全百回から成り、その内容を概観すれば底本が百回繁本であろうと予想するのは自然なことである。そしてその第七十二回相当部分において、宮中に忍び込んだ柴進が、三大

冠の一人として宋江の名を見つけるといふ描写を踏まえれば、底本が無窮会所蔵本の類である蓋然性は高まりそうに見える。まして無窮会所蔵本に類似した訳文の存在は、他にも指摘できるのである。

ただし「三大冠」の描写を除けば、そうした訳文は他の不分巻本にも見られる。またパリ本冒頭には好漢百八人を紹介する一覧があるが、その内容は不分巻本のうち百二十回本の「水滸忠義一百八人籍貫」に酷似する。またその「引首」もパリ本と似ている。

いっぽうでパリ本には、容与堂本など分巻百回本にのみ見られる詞(ここでは対句を連ねた美文を指す)が挿入されていることも観察できる。また不分巻本の大きな特徴である移置閻婆が為されていない。こうした例から、分巻百回本を翻訳した部分も存在することが考えられる。

ところで移置閻婆は、簡本系統の『水滸伝』においても基本的に見られない。またパリ本の回目や回の切れ目には、簡本に類似した個所も複数見られる。さらに簡本はけして単純な繁本の簡略版ではなく、林冲の妻の死に方など明らかに異なる場合も多いのだが、そうしたところもパリ本はしばしば簡本に類似する。総じてパリ本は、繁本で第六十回に相当する部分までは、訳文が簡本に似た部分も多いことが、おもに劉興我本との比較対照によって窺える。

このように満州語訳『水滸伝』は、少なくともパリ本に即した場合、底本の利用状況がかなり複雑な様相を呈していることを、背景として考えられる幾つかの可能性も含めて、具体的に明らかにすることができた。

以上の諸問題については主に論考の形で公表し、さらに中国語版は日本語訳出のうえで冊子にまとめて全国の都道府県立図書館などに寄贈するなど、ささやがながら研究成果の社会的還元を促進することもできた。

なお他にも各種の調査分析を進めており、将来その成果についても、何らかの形で公表する機会を得たいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 9件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 氏岡真士	4. 巻 10 (1)
2. 論文標題 “英雄譜” 又名《三國水滸全傳》二考	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 信州大学人文科学論集	6. 最初と最後の頁 49-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 氏岡真士	4. 巻 10(2)
2. 論文標題 《翠屏山》與《忠義 xuan2 圖》	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 信州大学人文科学論集	6. 最初と最後の頁 39-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 氏岡真士	4. 巻 9-1
2. 論文標題 『杜騙新書』における包公	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 信州大学人文科学論集	6. 最初と最後の頁 73-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 氏岡真士	4. 巻 9-2
2. 論文標題 鍾批《水滸》與三十卷本	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 信州大学人文科学論集	6. 最初と最後の頁 121-137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 氏岡真士・閻小妹	4. 巻 16
2. 論文標題 続『杜騙新書』の国立国会図書館蔵抄本について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 信州大学総合人間科学研究	6. 最初と最後の頁 161-196
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 氏岡真士	4. 巻 24
2. 論文標題 三多齋刊本『水滸後伝』について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国古典小説研究	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 氏岡真士	4. 巻 17
2. 論文標題 『俗語解』における『水滸伝』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 信州大学人間科学研究	6. 最初と最後の頁 17-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 氏岡真士	4. 巻 11-1
2. 論文標題 『徐雨峯中丞勸語』と『徐公〔yan4〕詞』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 信州大学人文科学論集	6. 最初と最後の頁 21-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 氏岡真士	4. 巻 11-2
2. 論文標題 満洲語訳『水滸伝』の底本	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 信州大学人文科学論集	6. 最初と最後の頁 91-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 伊藤加奈子・井上正夫・氏岡真士・閻小妹・佐立治人	4. 発行年 2023年
2. 出版社 「『杜騙新書』の発展的研究」プロジェクト	5. 総ページ数 197
3. 書名 『杜騙新書』の発展的研究	

1. 著者名 氏岡真士	4. 発行年 2024年
2. 出版社 科研報告書別冊	5. 総ページ数 152
3. 書名 清代後半を中心とした『水滸伝』の研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	閻 小妹 (Yan Xiaomei) (70213585)	信州大学・全学教育機構・特任教授 (13601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------